月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.99



新たな"赤毛"の冒険家、現る!?

も～っと集まれ！ファルコム学園

ついに届いたエステルの言葉、そして

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

『軌跡』シリーズ15周年！
リベール通信の迷(？)コンビが大活躍！

英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

メインストーリー第7章がスタート！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

『イース』といえば
このふたり!
アドル&ドギの
ビジュアルが到着!!

イースⅨ -Monstrum NOX-



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



Ys IX Monstrum Nox

イース IX -モンストルム・ノクス-

序文

自分ではない何者かになる。

そんな夢を見たことがあるだろうか？

その夢の中で私は考える。

これは自分なのか、自分ではないのか。

夢が現実なのか、現実が夢なのか？

私が辿り着いた答えはひどく単純だ。

『どちらでもいいではないか』

どちらが真実なのか——ではない。

どちらも真実なのだ。

～『バルドゥークの檻』本文より～

みなさんお待ちかねのアドル & ドギが登場！
そして発売日も決定 !!

『イースIX -Monstrum NOX-』

『イース』シリーズ最新作『イースIX -Monstrum NOX-』。今月は『イース』の主人公・アドルとその相棒・ドギのキャラクターイラストがついに到着！　そして、発売予定日も 9 月 26 日に決定 !!

タイトル：イースIX -Monstrum NOX-　**ジャンル**：アクション RPG
対応機種：PlayStation®4　**発売日**：2019 年 9 月 26 日予定
プレイ人数：1 人　**CERO レーティング**：審査予定

2019年 9月26日 発売！

『イース』といえばやっぱりこのふたり！ アドル & ドギが登場！ でもアドルの髪色が……!?



アドル・クリスティン

後の世に百余冊に及ぶ冒険日誌を残したとされる希代の冒険家。

アトラス洋で発生したロムン艦隊消失事件の重要参考人として手配されており、旅先の監獄都市バルドゥークでロムン兵に身柄を拘束されてしまう。

監獄からの脱獄を試みたアドルだったが、その最中、銃を手にした謎の女性に出会ったことで《監獄都市》と《怪人》にまつわる奇妙な事件に巻き込まれていくことになる。





※画像は開発中のものです。

ドギ

「へへっ。お前さん、やっぱり筋金入りの冒険中毒者だよ」



相棒としてアドルの冒険を支える力自慢の風来坊。巨体から繰り出される拳は強固な岩壁すら打ち砕くほど。
長年アドルの冒険に付き合わされているだけあり、人知を超えた事件や不思議な出来事にも冷静に対応できる。
アルタゴでの冒険を終えた後、ロムン帝国の属領であるグリア・エルトリンゲン地方へ到着したがアドルとともに旅先でロムン兵に見つかってしまう。





前号紹介した《怪人》ふたりの新イラストも到着！



新たな《異能アクション》の情報も到着！

《異能アクション》とは？

怪人たちが持つ超常的な力《異能》を発動させせることができる、今作独自のアクション要素。
街中、フィールド、ダンジョンを問わず、あらゆる場所で発動することができ、敵とのバトルだけではなく、ダンジョンのギミック解除や探索でも大活躍するとのこと。また《異能アクション》はバルドゥークに出現する《怪人》の協力を得ることで、どんどんと増えていくようだ。



王者の道（クリムゾンライン）











左手から放たれる赤黒い軌跡とともに、離れた場所へ一瞬で移動する異能。身体そのものを影のように変化させて移動するため、岩石や分厚い鉄壁のような障害物さえも突破してしまう。
更に、クリムゾンラインの直線上に敵がいる場合は相手を弾き飛ばし、ダメージを与えるといった効果も併せ持つ。

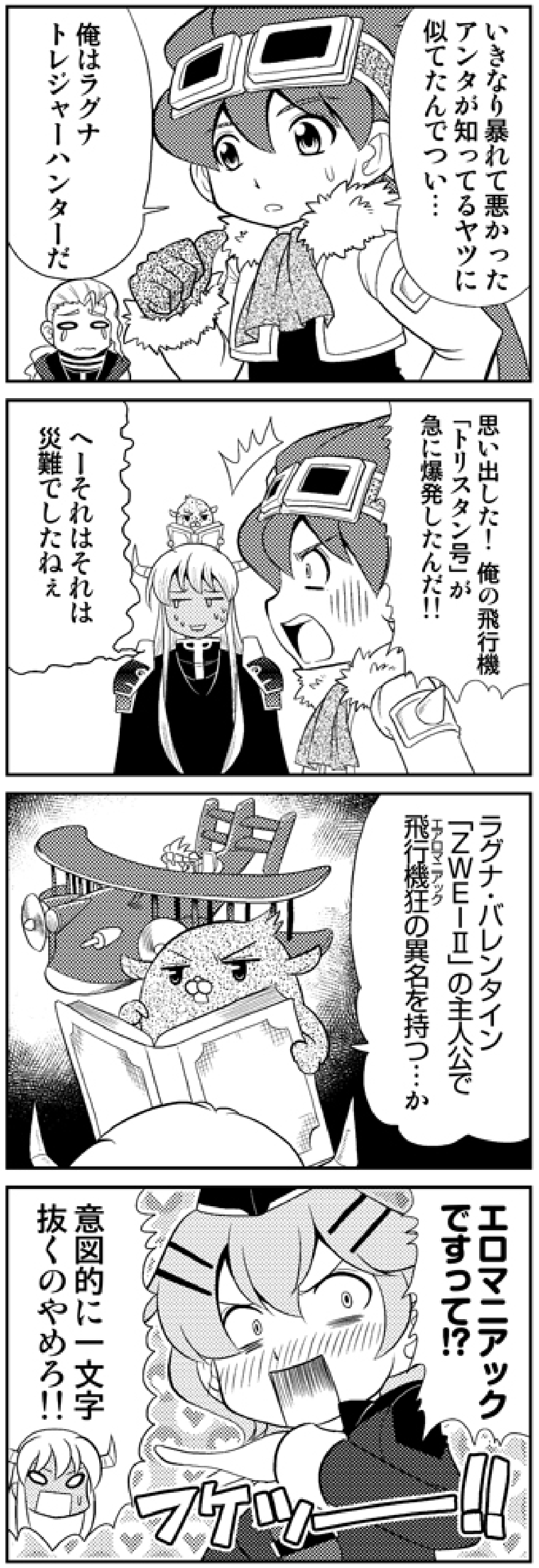
★ありがとう、キミのことは忘れない★



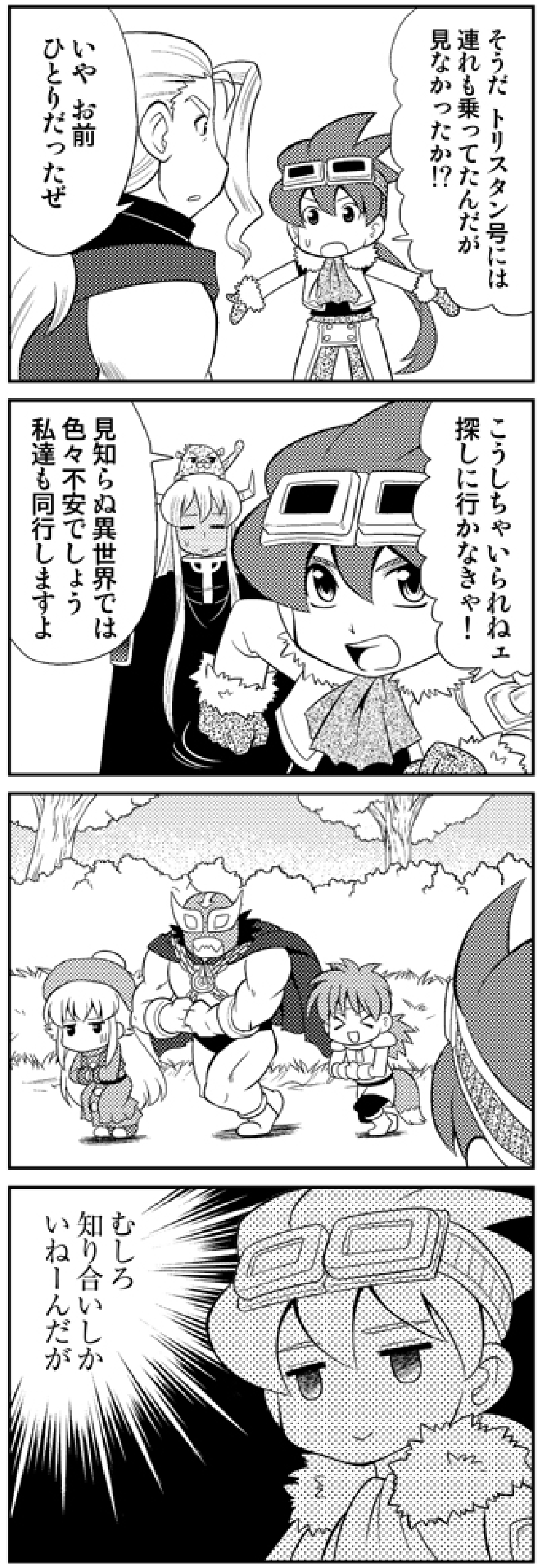
まぎらわしい髪型



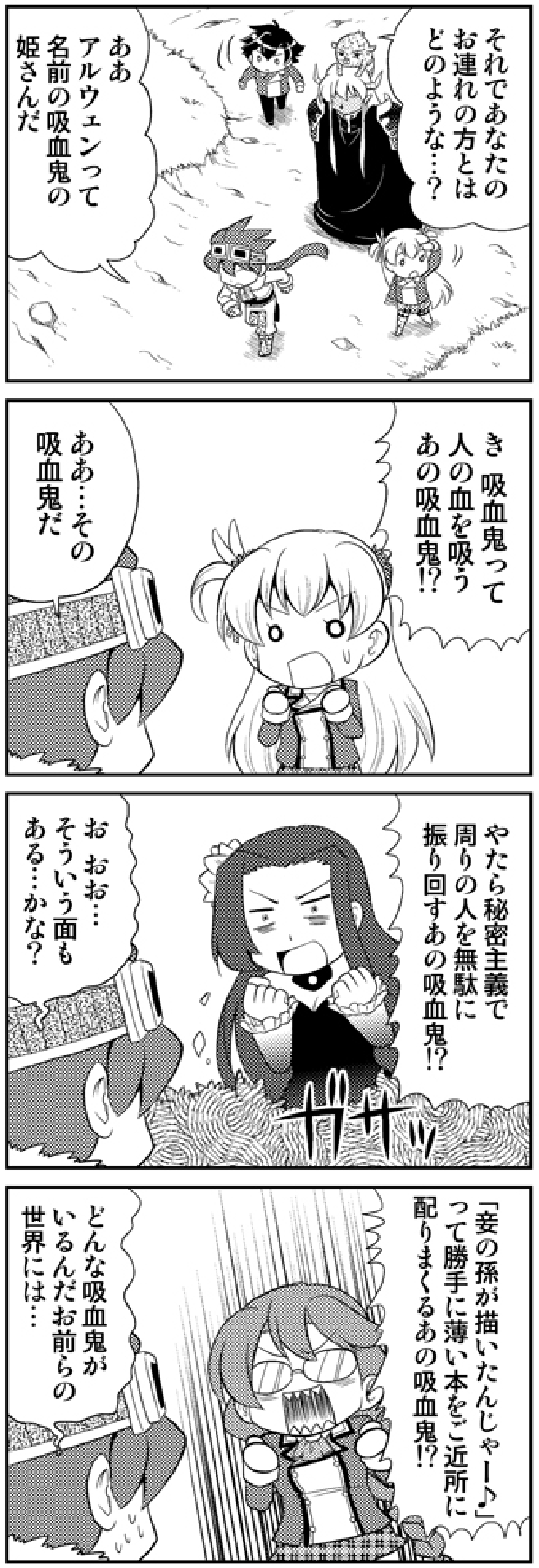
飛行機狂



異世界にひとり



その吸血鬼



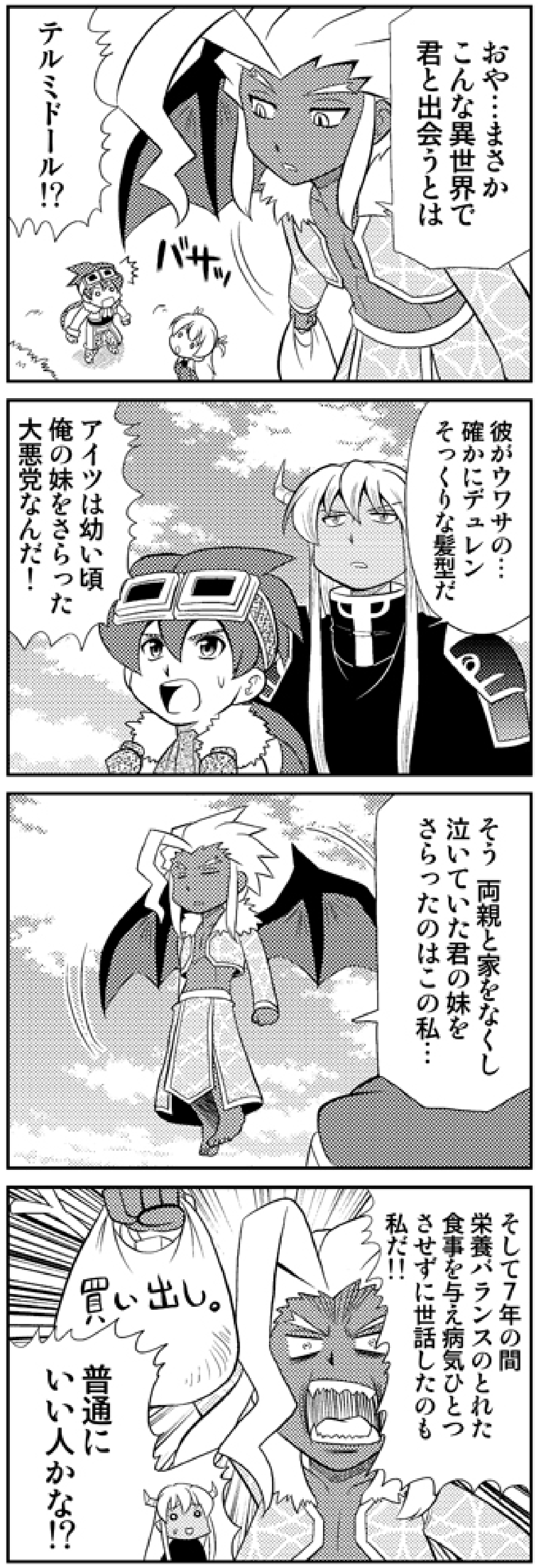
アンカーギア仲間



トレジャーハンターとの違い



すべて私のしわざ



ラグナの秘策



ただの人形



ドラマCD イースI&II



結束の闇の一族



歪みねぇ姫様



歪む飛行機狂

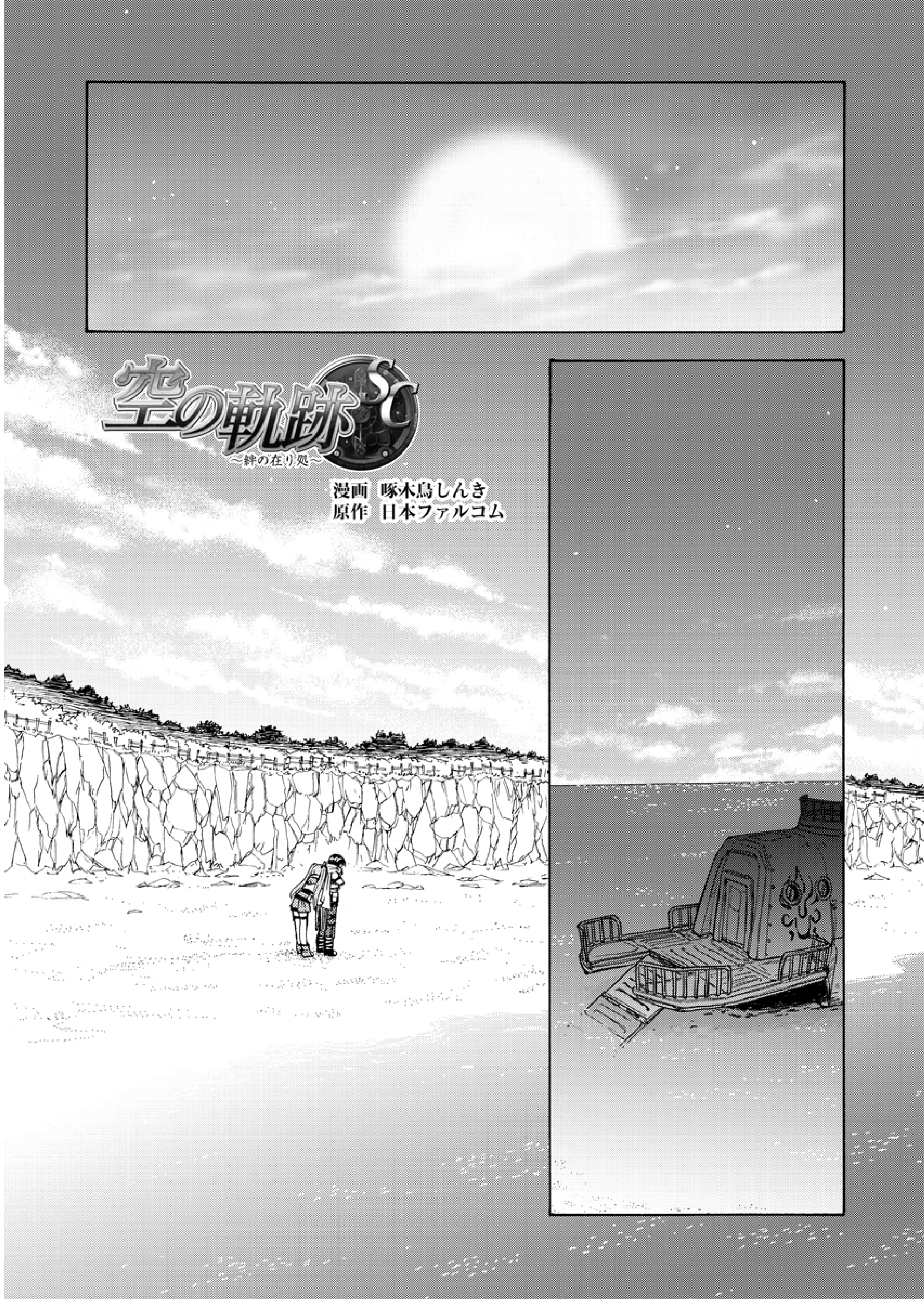


アガットのアはアイツ誰? のア




FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
ふぁるこむコミックざんまい
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


異世界《ザナドゥ》に
勇者よ再び！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園
1 著者：新久保だいすけ
定価：本体900円+税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！　果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks



空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム



…ごめん エステル
もう… 大丈夫 だから


えへへ
なんか…照れるわね
うん
そうだね
あ
そうだ！
これ
返すからね！


お姉さんの形見…なんでしょ？
そんな大事なもの
簡単に…
…じゃないんだろうけど
だからこそ人に渡したりしちゃだめよ
ヨシュアが戻ってくるまでは……って
預かってきたけど
もうそんな必要もないんだし
ヨシュアに返すね！


だけどエステル
僕は…
戻る資格がないとか言ったって
聞かないわよ?
いろいろやらかして悪いと思ってるなら
びし!
こそこそしてないで正々堂々ちゃんと謝んなさい!
でも
万が一君に…
あたしに危険が及ぶって言うつもりなら
それこそ聞く耳なんか持たないわ!


だってあたしは
この仕事を選んだからには危険から遠ざかってばかりはいられない
危険を承知で自ら飛び込んでいくことだってあるかもしれないわ
遊撃士だもの!
ヨシュアがいようがいまいが
その事には変わりないの
それは
あたしがあたしであるための道だから


《結社》の脅威が去らない限り
あたしはこれからも彼らを追い続けることになると思う
それはヨシュアも同じでしょ？
だったらひとりよりもふたりでいる方が
絶対いいに決まってるわ！
……
んー
だって そうすれば
こーんなかわいい女の子といつも一緒にいられるのよ？
ほらっ
おおう
ヨシュアだって
その方が楽しいと思わない？


ふ…
ふふ…
そんな…
かわいいなんて…
自分で言うとか…
あ や それは
だって ただでさえ そんな
かわいらしい格好してるのに…
ひゃあ
あ
なんか すっかり 忘れてたぁぁ
ちっ 違うのよ!?
これはシェラ姉が正遊撃士のお祝いに選んでくれたってだけで！
べっ 別に女の子らしくなりたいとか それを見せつけてやりたいとか
そーゆーことは全然思ってないんだからね!?


だけど
エステル
君は
本当に
本当に…
すっごく
かわいいなって…
…あぁ
もう
馬鹿だな
僕は…！
どうして
君と
離れられるなんて
思ったんだろう


こんなに…
こんなにも
君のことが
愛しくて
たまらないのに
ね…
ねぇ…
ヨシュア…


その…
は…初めてって…
女の子にとって…
やっぱり…
すっごく…大切なもの…
なのよね
…なのにっ
ヨシュアのせいで台無しになっちゃったしっ
そもそもスタートがあんなにひどかったから
いまだにずーっと悲しい想い出のままなのよっ
だから
その…
…ここで…
あの夜のやり直しを要求しても
…いいよね？
エステル…


こら――!!
まったく!!
ちょっと目を離したスキに!!
なーにをふたりで
いちゃいちゃしてんだよ!!


ジョ…ジョゼット!?
どうしてあんたがこんなところにいるのよ!?
べ…別にっ
あれからどうなろうと知ったことじゃないけどさっ
助けに入った手前
無事に逃げきれたかくらいは確認しておこうと思ってさ
助け?なんの?
は?
あん時あんたたちの乗った飛行艇
デカブツの仲間に追っかけられてやられそうだったじゃん


そこへさっそうと
ボクたちの山猫号が
現れて
あんたたちの
逃走を手助けして
やったんじゃないか
覚えてない
っての!?
えーと…
ごめん
寝てた
……
…かも。
はああ!?
なに言ってんの
この能天気娘はあ~っ
あ あんですって
まあまあ
とにもかくにも
無事でよかった
じゃないか
…で?
小僧は
この後
どうするんだ?


なんならまた
ボクたちの仲間に
してやっても
よかったんだけどさ
…その様子じゃ
聞くまでも
なさそうだな?
ジョゼット
ドルンさん
キールさん
ありがとう
僕は
エステルと
一緒に
戻ろうと
思います


エステル
敵は…
《結社》はあまりにも強大だ
正直…苦しい戦いになるだろう
うん
でも…
約束するよ
もう二度と
現実から逃げたりしないって
君と一緒に最後まで歩いて行くって



《剣帝》レオンハルトとともに現れた、古竜レグナートの暴走を抑えるために奮闘するエステルたち遊撃士一行。その頃、復讐者となったヨシュアはカプアー家の助力を受け、静かに結社《身喰らう蛇》へと迫りつつあった……。名作RPGのコミカライズ、迫真の第3巻！

昏き瞳の暗殺者《漆黒の牙》復活



著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム

定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3124-7

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら→www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら→www.field-y.co.jp/falcombooks



英雄伝説 零の軌跡
四つの運命
著者：田沢大典　イラスト：松竜



特務支援課は
ここから始まった!!

日本ファルコムの大ヒットＲＰＧ『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル

フィールドワイのHPはこちら → www.field-y.co.jp

『英雄伝説 空の軌跡FC』
ノベライズシリーズ
ついに完結!!

英雄伝説 空の軌跡
3 王都繚乱



正遊撃士になるため、リベール国内の各都市を巡っていたエステルとヨシュア。その旅路の中、失踪していたはずの父・カシウスから漆黒のオーブメントが届く。ふたりは父の行方と導力器の正体を探るべく天才導力学者ラッセル博士を擁する工房都市ツァイスへと向かうのだが……。



英雄伝説 空の軌跡
1 消えた飛行客船
価格：1,200 円+ 税



英雄伝説 空の軌跡
2 黒のオーブメント
価格：1,200 円+ 税

既刊シリーズも
好評発売中!!

2017年
好評発売中！

原作：日本ファルコム（『英雄伝説 空の軌跡』）
著：はせがわみやび
イラスト：ワダアルコ

価格：1,400 円+税
ISBN:978-4-8021-3067-7

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『イース セルセタの樹海：改』
発売を記念して、25年前のオリジナルBGMを使用した PS4テーマを無料配信！



PlayStation®4「イース セルセタの樹海：改」が2019年5月16日(木)に発売されることを記念して、PlayStation®Storeにて主人公アドル・クリスティンのイラストカットを使用したオリジナルデザインのPS4テーマを無料配信中。
BGMには、本作のリメイク元でもある「イースⅣ」で使用された楽曲「THEME OF ADOL 1993」（※）を使用したスペシャル仕様！今すぐチェックしよう!

「パーフェクトコレクション イースⅣ
The Dawn of Ys VOL.3」



（※）音楽CD『パーフェクトコレクション イースⅣ The Dawn of Ys VOL.3』に収録 （1994年発売）

■ジャンル：
アクションRPG
■対応機種：
PlayStation®4
■発売日：
2019年5月16日(木)
■価格：
「パッケージ版…3,980円(税抜) ／
ダウンロード版…3,500円(税込)
《公式サイト》
https://www.falcom.co.jp/ysc_ps4/



軌跡、イースシリーズから東京ザナドゥまで！
GraffArt SHOP店内に『Falcom Base』オープン！
対象店舗： 池袋本店/名古屋店/なんば店

4月20日(土)より、A3株式会社が運営をするGraffArt Shop店内において「軌跡」シリーズなどの日本ファルコム関連グッズを取り扱う『Falcom Base』のオープンが決定！
オープン時は既存の軌跡グッズやファルコムショップのグッズが購入可能になるほか、今後は各シリーズの新作グッズも続々登場予定！
『Falcom Base』公式Twitterアカウントから発信される最新情報もお見逃しなく！



■Falcom Base 公式Twitterアカウント
https://twitter.com/Falcom_Base
■GraffArt Shop with A3MARKET ONLINE
http://kyaragoods.shop-pro.jp/?mode=grp&gid=2012310

2019年4月29日（月・祝）に東京ビッグサイトで開かれる『character1 2019』の工画堂スタジオブースにおいて、ファルコム関連の新作グッズを販売!

「英雄伝説 閃の軌跡 IV」アクリルダイカットスマホスタンド
会場価格：各 1500 円
リィン / ユウナ / クルト / アルティナ / アッシュ / ミュゼ / エステル / ヨシュア / ロイド / エリィ / ティオ / レン / ティータ(全 13 種)

「英雄伝説 閃の軌跡 IV」箔キーホルダー　第2弾
会場特価：各 700 円
アリサ / エリオット / ラウラ / ユーシス / マキアス / フィー / エマ / ガイウス / クロウ（全 9 種）

「英雄伝説 閃の軌跡 IV」クラッチバッグ
会場特価：3000 円　サイズ：約 35cm × H50cm
クロウの武器イラストを使用したシックでクールなクラッチバッグ。

他、「閃の軌跡Ⅳ」箔キーホルダーや缶バッジなど既存グッズも販売!!

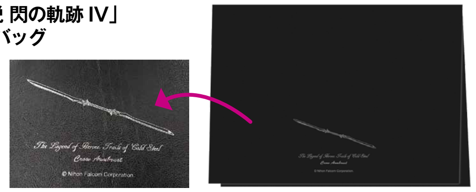
「英雄伝説 閃の軌跡 IV」アクリルダイカットスマホスタンド



「英雄伝説 閃の軌跡 IV」箔キーホルダー　第2弾



「英雄伝説 閃の軌跡 IV」
クラッチバッグ
拡大図



■開催日:
2019年4月29日(月･祝)
■開催時間:
11時～17時　(サポーターチケット入場:10時～)
■会場:
東京ビッグサイト西展示棟 4階
（東京都江東区有明 3-11-1）
■スペース:
No.332　工画堂スタジオ
■公式サイト:
http://www.character1.jp/

『英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-』×『池袋STORIA（ストーリア）』コラボカフェ開催中！

ストーリーRPG「軌跡」シリーズ生誕15周年を記念して、THEATER Cafe&Dining STORIA（池袋ストーリア）にて「英雄伝説 閃の軌跡Ⅳ -THE END OF SAGA-」の期間限定コラボカフェを開催中！
期間中、『閃の軌跡Ⅳ』のキャラクターをイメージした様々なコラボメニューが楽しめるほか、専用スタンプでコラボ限定ノベルティをプレゼント！また、店内では『軌跡シリーズ』の関連グッズなども購入いただけます。



https://sen4-cafe.com/

■開催期間:2019年4月27日(土)～2019年5月31日(金)
（※開催期間中に定休日がございます。ご注意ください）
■会場:THEATER Cafe&Dining STORIA(池袋ストーリア)
東京都豊島区西池袋1-15-9 第一西池ビル6F
■アクセス:JR池袋西口 より徒歩1分「タイトーステーション池袋西口店」6F
http://storia-cafe.com/



■「閃の軌跡Ⅳ」コラボメニュー
期間中、「閃の軌跡」シリーズの主人公リィン・シュバルツァーや新Ⅶ組メンバーをモチーフにしたコラボフード･コラボドリンクなど様々なメニューが登場!



■コラボ特典「閃の軌跡Ⅳ」コラボメニューをご注文いただいた方には「池袋STORIA」限定トレカをプレゼント!　さらに、「池袋STORIA」ご利用時のスタンプ3つで「閃の軌跡Ⅳ」オリジナルデザインのロングポスターをプレゼント!
※トレカ／ポスターの配布は数量が無くなり次第終了となります。
※ご利用1,000円につきスタンプを1つ捺印いたします。
（店内物販メニューの会計金額は含まれません。予めご了承ください。）

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。４月はメインストーリー第７章が実装！ナハトがついに自身の過去を打ち明ける！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー第７章 第１弾「試験班解散／前篇」が実装！

ナハト・ヴァイスは自らの過去を打ち明ける。自身が猟兵出身であること。アイリとは仲間だったこと。その仲間たちを見捨てて生き残ったこと――。
彼の告白に言葉を失うリーヴ。
疑念が確信に変わったロナード。
彼を信じたいと想うクロエ。
それぞれが試験班としての在り方を問う時、ひとつの決意が彼らを突き動かす。
そして――
クロスベルでは大火が上がる……。



※「試験班解散／後篇」は近日実装予定！



4月の新／衣装替えキャラクターをチェック！

マキアス・レーグニッツ

４月はⅦ組メンバーのマキアスとガイウスが暁の軌跡に参戦！ 遠距離を主体に戦い、戦局を有利に勧める支援型のキャラクターとなっているぞ

ガイウス・ウォーゼル

ガイウスは防御型でタフながらも、攻撃力も高く、原作同様、頼りになること間違いなしだ！

マッドハッター・カンパネルラ

カンパネルラが「不思議の国のアリス」のマッドハッターをイメージした衣装に。アリスを"狂ったお茶会"に招き、なぞなぞや不思議な言動で翻弄する姿はまさにカンパネルラそのもの！

チェシャ猫・リーシャ

リーシャはチェシャ猫衣装に。姿を自由に消したり現したりすることができるチェシャ猫は隠形が得意なリーシャそのもの！ ただし、ニヤニヤした笑いはせずにしっとりと微笑むところがリーシャらしい。

5月の新規衣装替えキャラクターは？

※画像は開発中のものです。 ※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

2019年は『軌跡』シリーズ15周年！

英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

歴代『軌跡』原作
ファルコムBOOKS
試し読み！



©MIYABI HASEGAWA, KOJI NISHINO

『軌跡』シリーズが2019年6月に15周年を迎えることを祝して、『軌跡』シリーズを原作としたファルコムBOOKSのお試し読みができる特別企画。第4回は、『空の軌跡』シリーズより、リベール通信の迷(?)コンビ・ナイアル＆ドロシーの活躍を描いたはせがわみやび先生の『英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット』をお届け！

製品情報

好評発売中

著　　　：はせがわみやび
イラスト：西野幸治
定　　価：1,200円円（税別）



■第1話

突撃！ メイベル市長の華麗な一日

1

商業都市ボース・北街区。

昼の強い日差しが、通りの石畳を焦がし、道行く人々の足下に小さな影を作っている。

東西に伸びるその通りを、靴音をぺたぺた鳴らして駆けるひとりの少女がいた。

明るい色のブラウンの髪が風になびき、頭の後ろで束ねた黄色いリボンが跳ねている。小さな丸い眼鏡を掛けていた。どこかほんにゃりとしたゆるい雰囲気が漂っていて、急いて走っていてもその印象は変わらない。

と、一軒の店の前で、彼女の首がぐりんと曲がる。

「おおっとぉ」

足をいきなり止めたものだから細い身体が泳いだ。

「っと、とととっと！　ああああ」

コケそうになったが、かろうじて踏みとどまる。

「はあはあ。と、通り過ぎるところでしたぁ」

ゆるゆるした台詞を吐き、見上げる看板には、『キルシェ』と書かれていた。ボース市の北西にある大きな居酒屋だ。昼はボース市民の食事処として商っている。

切らしていた息を整えつつ彼女は扉を開けて中に入った。

ざわめきに包み込まれる。

二階まで吹き抜けになっている大きな店は昼下がりだというのに客でいっぱいで、肉の焼ける良い匂いと熱気で満ちていた。

天井で五枚羽の飾り風車が、籠もった昼の熱を生ぬるく掻き混ぜている。

お腹がぐーっと鳴る。両手で押さえつつ、彼女は視線を巡らせた。カウンターに座る男の背中を捕まえる。

「センパイ！　ナイアル先輩！」

呼ばれた男が振り返った。

「んぁ？　おまえか、ドロシー。どこへ行ってた。遅っせぇぞ！」

「マーケットですよぅ。ついでに焼きつけを済ませてきちゃいましたから。ほらほら見てください。可愛いです～」

とたた、と走り寄って、ドロシーと呼ばれた少女は肩に提げた鞄から、大きな封筒を取り出す。

「ちょ、ちょっと待て！　それ、写真か？　んなところで広げるなっての！」

「はいはい。だいじょうぶです」

「なわけあるか！」

そう言っても聞かないことは分かっていたので、ナイアルはカウンターの上から慌てて皿を避けてスペースを作る。

「っと、もったいねぇ」
「意地汚いですよぅ、先輩。そんな指についたスープを舐めるなんて」
「誰のせいだっつーの！」
「そんなことはどうでもいいんです」
「よくねぇ！　てか、話を聞け！」
「ほらほら。ボースマーケットですよ！　このコってば、すっごくエレガントなコですよねぇ」
ドロシーが封筒から写真を何枚も取り出して並べ始めた。
狭いカウンターの上がいっぱいになる。
相変わらずの写真バカだ。ナイアルは思った。
いや――。
ナイアルは並べられた写真を見て目を瞠る。
「こいつは……！」
バカと紙一重のほうか。
「どーですか、先輩？」
「どうやって撮った……？」
「えっ。ふつーですよ。ぐるっと回って」
にっこり微笑んで言った。

それらは、ボースマーケットを撮った写真だった。
ボースマーケットは、商業都市ボースを象徴する巨大な百貨店だ。街の北の中心に聳え立ち、百貨の名の通り様々な店がひとつの建物に入っている。
その巨大さは、市の北街区の四分の一ほども占めると言えば判るだろう。
並べられた写真はボースマーケットをぐるっと外から回って撮られたものだった。
ハガキほどの大きさの十枚以上の写真を互いに繋がるように並べているのだけれど、驚いたことにくっつけると切れ目がわからない。一枚一枚の写真が左右でぴったり合わさっていて、建物の外周三六〇度に渡って映されていた。
少しずつ重なるように撮るならできるだろう。あるいは東西南北のそれぞれ正面から撮っただけならば、それもわかる。
だが、これは……。
「おまえ、三脚とか使ってなかったよな？」
「はい？　はい、そうですけど」
きょとんとした顔つきでドロシーが答える。
――それで、このパノラマ写真を撮ってみせたってのかよ！
ナイアルは内心で舌を巻いた。
しかも、東側から撮った写真も西から撮った写真も、きれいに日差しを受けている。という



ことは、こいつは建物いっこに丸一日を費やして撮りあげたってことだ。
目の前の娘、ドロシー・ハイアットは、まだ二十になったばかりだというのに、リベール通信社のカメラマンとして雇われている。オーバルカメラの天才ってやつなのだ。
「マーケットさんは、背が高いだけじゃぁなくて、お洒落さんで、とっても可愛いコですよ～」
とドロシーが言った。彼女の目にはどうやら建物や風景がひとりひとりの人間と同じ個性豊かな表情を浮かべて見えているらしい。
「うまく撮れているじゃないか。ドロシーくんは写真が上手なんだねぇ」
カウンターの向こうから『キルシェ』の主人も褒めた。注文をとって、ドロシーの前にもレッドテールスープを置く。
「ありがとうございます～。えへへ」
照れて頭の後ろを掻く仕草はとても天才には見えなかったが。
「っと。そうでした。それで、先輩のほうはどうだったんですかぁ？」
ドロシーの問いかけにナイアルの表情が変わる。苦虫を噛んだような顔になった。
「失敗だ」
「えー？」
「インタビューを受けている時間はない、とさ。取りつく島もねぇ」

一方のナイアルのほうはリベール通信社に雇われている記者である。雇用されているのだから社の方針には従わなければならなくて——具体的に言えば、この市の市長へのインタビューを敢行することを命じられていた。
のだけれど、あっさりと断られ……。
「市長さんですもんねえ。お忙しいんですねー」
「そりゃ、そうだろうが……。せめて会うだけでもできりゃよかったんだがな」
あの市長つきのメイドは優秀すぎる。まるで鉄の女だ。会いたいというナイアルの依頼をあっさりと切って捨てて畳んでつき返してきた。
「それとも、また頼み方がまずかったんですか？」
「ぐっ！　……おまえな」
悪気はないのはわかるのだが痛いところを突きやがる。
「先輩、有名人の記事とか苦手ですもんねぇ」
「言うんじゃねえよ！」
たとえ事実でもだ。
ナイアルはあまり人間付き合いが得意でない。コネを操ることもお世辞を言うことも苦手なナイアルにとって、有名人のゴシップ記事ほど苦手なものはなかった。
本音を言えば、事件だ。もっと大きな事件を追いたい。記事を書きたい。そう思う。

だが、インタビューを取らねば社から報酬が出ない。
ミラが無ければ次の街に行くこともできはしない。ここで足止めだ。それどころか、ホテル代だっていつまで持つか。このままじゃ数日後には青空を天幕にした素敵なサバイバルライフが始まることになる。
世の中、万事ミラ次第……せつねぇ。
「消えた飛行客船の行方もまだ突きとめてねえってのに。くそっ！」
拳で膝を叩く。
「仕方ないですねー」
「あのな。おまえも一蓮托生だってこと忘れるなよ？　記事が取れなけりゃ、写真の経費は落ちないからなっ」
「ええっ!?　それは横暴ですよぅ」
「当たり前だっつーの、このトンチキ娘！」
「ううん。困りましたねー。けっこう、いっぱい撮ってしまいました。これからの焼きつけ代だけでも、ええと……。とにかくいっぱい掛かりそうなのに」
うーんうーんと唸るドロシーを横目で見ながらナイアルはカウンターに頬杖をついた。
さて、どうしたもんかな、とつぶやく。
「あ、そーいえば……」

「うん？」
「その市長さんですけど。マーケットで聞いた話では、よくひとりきりでお店を視察しているって」
「ひとりきりで、だと？　市長が？」
　まさかと思ったのだ。ボースは充分都会だ。王都グランセルに比べれば小さいとはいえ、この街で市長が供も連れずに歩き回ってるって？
「ああ、メイベル市長はそういう方ですよ」
　答えが意外なところから返ってくる。カウンターの向こうで店主が皿を乾いた布でこすりながら言ってきた。
「マジか？」
「はい。まだお若いのに、前の市長であったお父様を亡くしてから立派に市長の職を継いでらして……。その商才というか、経営の手腕は父親をしのぐとのもっぱらの噂です」
「ほー。すごいんだな」
　思わず、という感じで漏らしてしまったひとことだったけれど、自らの市の市長を褒められてよほどうれしかったのか、彼は延々とメイベル市長がいかに素晴らしいかについて語りだした。
　曰く、商業都市ボースが近年著しく貿易利益をあげだしたのは市長がきめ細やかに貿易品を

監視しているおかげである。安く買って高く売る。商売の基本を忠実に実行しているだけなのだが、その簡単なことが実は難しい。
　メイベル市長はボースと他国の間で売り買いされているあらゆる品目について常に目を光らせているのだという。
　店長は延々と語り続けた。
　さらに市の経済の中心であるボースマーケットは、メイベル市長自身がオーナーであることもあって、自ら視察を繰り返している、と。
「オーナー……経営者だって？　あのでかい店の、か」
　店主に頷かれてナイアルは言葉を失う。
「メイベル市長って、まだ若かったよな？」
「確か、二十一とか」
「に……にじゅういちぃ？」
　こいつとたいして変わらない……だと？
「な、なんですか、先輩。その目はいったいなんですかぁ」
　思わず振った視線の先で、ドロシーが走って乱れた髪をなでつけ、リボンを引っ張って整えていた。眼鏡の弦を中指で押し上げてお澄まし顔をしてみせる。また無駄なことを。そんなんでしっかり者に見えたら苦労はない。

しかし……。二十一で市長を勤めるだけでも信じられないが、その上で街で一番でかい商業施設ひとつの経営者……だと？

「すげえ、な……」

「だろう。しかも、それだけじゃない」

「ほう」

「美人なんだ」

「…………………だから、どうしてそこで落ち込んでやがる、ドロシー」

「しっかり者で美人さんなんてずるいです……」

「おまえ、今までそんなの気にしてたことねーだろ⁉」

「でもなんとなく、ですねぇ」

「あのなぁ。カメラマンはおまえしかいねーんだから、しっかりしてくれよな」

「はぁ……はい」

――ま、放っておくか。いつもみたいにそのうち立ち直るだろうし。

「なるほどな。市長にとっちゃ、マーケットの視察も仕事というわけか……」

そのとき、ナイアルの頭にひとつのアイデアが閃いた。

「そうか……ひとりで視察、ね……」

よし、と腹をくくる。

インタビューを申し込んで断られた以上、正攻法では市長の記事は書けない。ならば、ボースマーケットに潜入して、その視察の様子ってやつを見てやろう。

まるでゴシップ記者のようだが、背に腹は換えられない。

記事のタイトルも思いついた。

『突撃！　メイベル市長の華麗な一日』

まるで大衆雑誌の見出しのようだが、それくらいのほうが割り切って書ける！　……気がした。たぶん。

おし、とナイアルは気合を入れる。残っていた真っ赤なスープを飲み干すと、さっそく取材の段取りを考え始める。

「ドロシー」

「はい。なんですか、先輩？」

このときナイアルは、自分の次のひとことが思わぬ波紋をもたらすなどとは思っていなかった。

「おまえ、こっそり盗み撮りってできるか？」

あくまでも気軽に、カメラの天才に聞いただけのつもりだった。

「……へ？」

オーバルカメラの手入れを始めていたドロシーが振り返る。困惑の表情のまま彼女は固まっ

ていた。

2

「困りましたねー」
真夜中近く。フリーデンホテルの自らの部屋で、焼きつけた写真の整理をしながら、ドロシーは先ほどから何度も同じ台詞を繰り返していた。
「大丈夫でしょうかぁ。はあ。っと、これは可愛いコですから、こっち」
一枚の写真を机の右手に重ねる。ルーアンの街の時計台を写したものだ。
「これはかっこいいコだから、こっち、っと」
左側に重ねたのは岬の灯台の写真で、右上隅の空に一羽のカモメが映りこんでいる。
写真の差は余人にはさっぱりわからないものの、ドロシーには明らかなようで、独自の基準で迷うことなく振り分けていく。
大量の写真を仕分け終わると、それぞれを封筒に入れて整理する。ひととおりの作業を済ませてから、ドロシーはふたたびため息をついた。
「困りました……」
何度目になるかわからない呟きを繰り返す。

ナイアル先輩が名物市長の記事を欲しがっているのは理解している。書かないと報酬がもらえない、わけだ。ドロシーにとっても困ることで、なにしろ写真というのはそれなりにミラがかかる。
けれど……。
自分に隠し撮りなんてできるだろうか？
先輩は言っていた。「ゴシップが書きたいわけじゃねえ。紙面に載せる前にちゃんと許可は取る」、と。
あくまで市民の目でありのままの市長の働きぶりを見守り、記事にしたいだけだ、と。そう言いつつも目が泳いでいたから、ナイアル先輩にとっても不本意で後ろめたさがあるようだけど……。
メイベル市長の振る舞いを自然に撮ってくれればいい、と言っていたのだ。
けど、問題はそこではない。
「わたし、静かに写真なんて撮れるんでしょうか？」
自問自答してしまう。
ドロシー・ハイアットはカメラを構えたときに黙っていた記憶がない。
というか、ありていにいって——うるさい。
と、しばしば言われる。

「でも、ご機嫌よくしてもらわないと、よい顔はしてくれませんしねぇ」
モデルが、静かに佇む木々であろうと、物言わぬ古代遺跡であろうと、よい気分になってもらってこそ、素敵な表情を撮ることができる。ドロシーには当たり前のことなのだけれど、あまり周囲の理解は得られていない。
それでも、いつも精一杯もてなしてから、シャッターを切っている。
もはや自分がそんなことをしているなんて意識にさえ昇らないほどに。
だから――こっそりと、なんて……。
「できるんでしょうかぁ？　はあ」
明日は早い。ナイアル先輩と待ち合わせた時刻は日の出よりも前だった。
とまどいを抱えたまま眠りにつき――。
夜が明ける少し前にドロシーは目が覚めた。
胸の内の不安は倍の大きさに膨れていた。

3

綺麗だぁ、とドロシーはその屋敷を見て思った。
メイベル市長の暮らす邸宅は、個人の住む建物としては、おそらくボース市でもっとも大きいもののひとつだ。
二階建てで、南の棟だけは窓を見る限り三階まで存在する。
壁一面が白い石を組み上げてできており、昇って間もない柔らかい朝の光が、壁を薔薇色に染めていた。まるで頬を赤らめている貴婦人のように見えた。
張り出し窓は大きなガラス入り。きらきらと朝日に光っている。
今すぐにシャッターを切りたい。
ドロシーは思ってしまう。うずうずする。
「ダメだ」
「まだ何も言ってないですよぅ」
「だったらカメラを降ろせっての！」
「はっ！　つい」
いけない。いつの間にか構えていた。
ドロシーとナイアルは市長宅の門が見通せる通りの角に潜んでいた。
日の出前からココに突っ立っているから、そろそろ足が痛くなってきている。お腹も空いてきた。眠気だって――
「ふわわわ～」

「声を出すなっつーの！」
「んぐっ……うう、ふぁぁああ。む、むりふぇふよぉ」
　それでも欠伸を噛み殺そうとしたら、目尻に涙が浮いた
「おまえな。今日の獲物は建物じゃねえって言ってるだろ！」
　ぺしっ、と頭をはたかれる。
　目じりに浮いた涙が零れた。
「女の子の頭をぽんぽん叩かないでくださいよぅ」
「おれは後輩には厳しい先輩でありたいと思ってるんでな。……しかし、動きがねえな」
「何がですかあ？」
「おかしい。いくらまだ朝早いからって、市庁舎のほうに向かうにしても、お忍びで視察に出るにしても、そろそろ動きがあっていいはずだ。おい、なんか見えるか？」
「わたしのカメラは遠眼鏡ではないのですけどぉ」
　ぎろっと睨まれて、ドロシーはカメラを抱えなおした。
　オーバルカメラは小さくても、導力革命以後の最新技術が詰まった精密機械だ。レンズの部分にだけは古い匠の技が使われているけれど、内部装置や記録媒体には七耀石を組み込んだ最新の結晶回路が使われている。
　鞄から望遠用の交換レンズを取り出してカメラにセット。屋敷にレンズを向け、遊撃士の使

う導力器に似た（ただし、大きさは五分の一ほど）円盤を指先でなぞりあげれば、カメラの後ろにある投影板にレンズを通した画像が現れ、ピントを結んだ。
　ドロシーは、機械だけに頼るのは好きではなくて、ファインダー越しにマニュアルでセッティングするほうが好みなのだが、今は先輩に見せなければならないから仕方ない。
　投影板に、一階のガラス窓越しの室内の様子を写しとる。
　ピントＯＫ、絞りもチェック。ん。ばっちりだ。このままシャッターを切れば——。
「っと、撮影するのではありませんでした」
「なんか見えるか？」
「こんな感じですけど」
　投影板に映し出された画像をロックしてからナイアルに見せる。記憶子には保存してないから、ロックを解除すれば映像は消えてしまうが、今は問題ない。
　食堂らしきところで屋敷の使用人たちが集まっている光景が写っている。
　こんなことをしていると、まるで遊撃士か街の自警団の張り込み捜査みたいだ。
「片づけてやがるな」
「そういえば、のんびりした感じですねー」
　互いに笑い合いながら、テーブルを拭いたり、食器を抱え持ったり、すっかり朝食後のひとときという感じ……。

「あれ？　あれれ？　そろそろ朝食のお時間というところだと思うのですが」
「……さては！」
　顔色を変えたナイアルが角から飛び出すと、屋敷の門柱に飛びついた。
　呼び鈴を鳴らしまくる。
　険のある表情を浮かべ、ひとりの若いメイドが出てきた。不機嫌そう。美人が怒るとちょっとおっかない。
「またあなたですか。記者ナイアル・バーンズ殿。メイベル様へのインタビューは昨日お断りしたはずですが」
「市長は？」
「ご用件は？」
「いるのか！　いねーのか！」
「ご用件は？　どのようなご用件でしょう。アポイントメントはお済みですか？」
　——すっごい、このひと。
　ドロシーは内心でだらだらと冷や汗を流しまくりつつ一歩引いて見守ってしまう。
　心臓がドキドキしていた。
　ナイアル先輩は、決して恐ろしげな風貌をしているわけではない。目つきこそちょっと怖いけれど、体格はふつう、というかやや細めだし、筋肉だってついてない。

　安売りで買ったよれよれのシャツを胸元をだらしなく開けて、いつもネクタイをゆるく巻いている、一歩間違えれば失業中のおじ——お兄さんみたいななりをしているだけのふつうの青年だ。
　が、だからといって、目の前のメイドさんから見れば、年上の男の人なわけで……。こうまでクールにあしらえるものだろうか。
　ナイアル先輩を足下を歩く蟻か羽虫のような態度できっぱりはっきり応対してる。
「だから、家にいるのかって聞いている！」
　先輩も負けてなかった。
　まだまだしぶとく粘っていた。
　ジャーナリストの鑑かも。ドロシーは素直にそう思い、ふと気づいた。
　あれ？
　——いま、このひと、すこし笑いませんでしたか？
　頭に血を昇らせているナイアル先輩はまったく気づかなかったようだが、ほんの少しだけ何かを企んでいるかのような笑みがメイドの口許に浮かんだ、ような。
「市長は、もうお出かけになられました」
　それまで頑なにナイアルの問いかけを無視していたメイドが言った。
「どこへ！」

「さあ――」
余計なことは話さない口数少ないメイドが言った。
「ただ……本日は公務は入っておりません」
言外に、市庁舎には行ってないと匂わせた。ナイアルが「マーケットか！」と短く叫ぶ。
「出遅れたか。行くぞ、ドロシー！」
「は、はいですぅ！」
駆け出した先輩を追って、新米カメラマンは鞄を抱えなおして走り出した。
ふたりの背中を見送ったメイドが「では、こちらも準備を始めましょうか」と小声で呟いたが――。
午後の風にさらわれたその声が、ナイアルとドロシーの耳にまで届くことはなかった。

4

ボースマーケットは四方を大通りに囲まれた、上から見ればほぼ真四角な形をした建物だ。通りに沿った白亜の壁沿いには季節の花を植えたプランターが置かれ、道行く人々の目を楽しませていた。

マーケット西側の入り口。
ドロシーとともに佇み、ナイアルは建物を見上げる。
「ったく、こんなに高くつくる必要があったのかねえ」
市の北側の四分の一ほども占める広さがあるのだから、それだけで充分な店が入ることができる。事実、中は吹き抜けの平屋で、二階さえない。
それなのに、屋根は三階ほどの高さにある。
「中に噴水までありますから」
「いやそれおかしいだろ。そこまで吹きあがらねえぞ⁉」
後輩の言葉に思わずナイアルは突っ込む。
百貨店の中央にちょっとした広場と噴水があるというのは、確かにすごいことだとは思うが、だからといってこれだけの高さは必要ないはずだ。
「薬局も青果店も金物屋も入ってますよー」
「だからそーいう問題じゃ――ええい、入るぞ！」
出窓のように半円をした形の正面のガラス扉は、真ん中から左右へと回るように開く面白い構造をしていて、しかも人を感知して自動で動く。こんなところにも、導力革命の成果を見てとることができた。きっと、導力器を使っている。
西から入ると、右手すぐには洋服屋、左手は雑貨屋が商いをしている。そこを皮切りに、店

内のずっと奥まで異なる店が延々と連なり様々な品々を並べていて壮観のひとことだった。
つまり、ここは「ボース市の市場」なわけだ。『ボースマーケット』はひとつの店の名前ではなく、建物につけられた名前ということ。メイベル市長が持っている権利というのは、この建物への出店を許可する権利であり、彼女は市場の管理人である。
「ほんとにたくさんのものを売ってますよねぇ。それに人がいっぱい」
「キョロキョロしてんなよ、首が痛くなるぞ！」
「ですよねー」
真顔で頷かれた。
……痛めたことあるのかよ、こいつ。
しかし——この中から、市長を探すのか……。
しかもお忍びでボースマーケットに来ている、というのは当て推量であって確証はないわけだった。
一瞬、やめちまおうかな、と弱気になるが、ナイアルはかろうじて思いとどまる。一文無しで野宿は嫌だったし……。
——大体、おれはそれでもかろうじて耐えられるかもしれねぇが。
ちらりと横に立つ相棒を見る。
——こいつは無理だろうしなぁ。

「先輩、どこから捜しましょう？」
「あー」
盗み見たとたんにこちらに顔を向けられて、ぎくりとしてしまう。ほんの少しだけナイアルはうろたえた。相変わらず人の視線には聡いやつだ。カメラマンの習性なんだろうか。
「とりあえず、ぐるっと回ってみる」
「はい〜」
ゆるい返答に、だいじょうぶか？　と不安になりつつ、ナイアルは店内をゆっくりと見て回り始め、しばらくして気づいた。
そういえばまだ市長の顔を知らなかった。
——意味ねえじゃねえかよ！
図書館か市庁舎にでもよって、紳士録（フーズ・フー）でも見ておくのだった！
「あれ、すごいですねえ」
ドロシーの声にナイアルは顔をあげる。
ほらほらと指差すほうを見ると、金物屋の店先だった。金物だけでなく、皿や鍋などの陶磁器も売っているらしい。平台があって、『特売』と書かれた貼り紙とともに白い簡素な皿がうず高く積まれていた。
「てか、積みすぎだろ、おい！」

視線より高いところに一番上の皿がある。ナイアルが手をいっぱいに伸ばしてかろうじて届くかどうかというところだ。
なんだかゆらゆらと揺れているような気さえする。
「おいおいおい。やばくねぇか、あれ」
しかも、恰幅のいい女性がひとり、目を輝かせながら「安いわぁ」と言いつつ、強引に白い皿の塔の中ほどから一枚抜き取ろうと――って、無茶だ、それは！
「せせ、先輩！」
「馬鹿が！」
――くそっ、派手に揺れてやがる！
客にぶつかりながらも駆け出したが、とうてい間に合いそうもない。
「だめですよ」
涼やかな声とともに、揺れていた皿の塔がぴたりと静まる。
ナイアルの足が止まった。
人波の向こうに、皿の塔を支える女性の姿が見えた。
栗色の髪をした二十歳ほどの少女だった。リボンの色と同じ赤い上着を羽織り、胸元を大きな青い宝石で留めている。ピンク色の内服にはひらひらがついていて、なんだかとても高そうだ。

「あぶないですから、こういうときは店員を遠慮なく呼んでくださいね」
そう言いながら、皿を抜き取ろうとした女性ににこりと微笑む。不満げな顔つきに一瞬だけなったものの、彼女は自分を咎めた相手が誰だか判るにつれて表情を変えた。
「し、市長！」
「はい」
「もも、申し訳ありません！　あのそのあの……」
「いいえ。あなたにお怪我がなくてなによりですわ」
――市長、だと⁉
数歩前でかろうじて止まったナイアルは慌てて陳列棚の影に潜んだ。「せ、先輩」と声をかけながら近づいてきたドロシーの頭を抑えこんで自分と同様に隠れさせる。
「むぎゅ」
「声を出すなっつーの！」
――あれが、ボース市の市長、メイベルか。
本当に若かった。しかも美人だった。
メイベル市長は店員を呼んで客の相手をさせると、そのまま自分は店主を店の裏まで連れて行って、危険な皿の塔をやめるように言い聞かせた。
「この並べ方は危険です。お客さまが怪我する可能性があるわ。改善するように」

柔らかい声だが、有無を言わせないきっぱりとした物言いに、金物屋の主人が平謝りする。
「あなたがいつも安い品を苦労して仕入れてきてくれるのは知っています。だからこそ、こんなことでお店の評判を落としてはいけないわ。ね？」
「あ、ありがとうございます！」
大声の持ち主の店主はそう言いながら、ぺこぺこ頭を下げた。
あれだけ声を張り上げてしまっては、せっかくメイベルがバックヤードに連れて行っても意味がなくなってしまう……。
それでも誰ひとり嫌な思いをさせることなく収めてしまった市長の行動にナイアルは舌を巻いた。本音では二十一の小娘にどれほどのことができるかと――侮っていなかったと言えば嘘になる。
「ドロシー。撮ったか？」
「んーんーんー」
「っと！　わりい」
しまった。口を塞いで棚の隅に押し込んだのは自分だった。忘れてた。
「んふぁぁ！　はあはあはあ。ひ、ひどいですよぅ、先輩。はぁ。苦しかった」
「いいから、声を抑えろっての。カメラだ、カメラ。何枚か、撮っとけ！」
「は、はい」

「静かにだぞ！」
「う、ひゃい！　わわ、わっかりましゃ……まひた」
きゅっと口を結び、かろうじて半身が見えている市長へとカメラを構える。もちろん棚の陰からだ。口を開いては閉じ、開いては閉じた末に（声を出さないように葛藤してるのだろう）、シャッターを押し込み、何枚か写真に収めた。
バックヤードから出てきたメイベルは、そのまま店の巡回を続けるようだった。ナイアルもドロシーと共に隠れつつ後をつける。
金物屋から雑貨店へと移動。市長はそこでまた足を止めた。
書棚の前を行ったり来たり繰り返している青年がいて、困った顔をしたままチラチラと店主の方を見ている。
探し物をしているようだが、あいにく店が混んでいて、主のほうは気づかない。
メイベル市長がそっと近づき、青年に声をかけた。
「本をお探し？」
声をかけられた青年は市長の顔を知らないようだった。旅行客らしく、話しているうちに、商売を学ぶために商業都市ボースにやってきたとわかる。
「それでしたら、お勧めはこれかしら」
書棚から一冊の本を抜き出して見せる。

軽く本の説明をしてから、それ以外にも数冊を選んでみせた。
——まさか棚の本をぜんぶ覚えてるわけじゃねーよな？
それは無いだろうとは思ったが、淀みなく選択するってことは、恐らくは自分も学ぶときに使った本なのだろう。経済発展を続けるボースの敏腕市長の推薦本とも気づかずに、青年は感謝の言葉を述べて売り場に向かった。
「はあぁ、なんだかすごい人ですよぅ」
「まあな。って、おい。今のはちゃんと撮ったか？」
「はぁ。まあ、その……撮りました、けど」
「けどなんだよ」
「なんか……ヘンなんです、ケド」
「何が変なんだ？」
「んー。……なんか、です」
要領を得ないドロシーの返事にナイアルは訝しむ。
だが、問い正している余裕はなかったのだ。メイベル市長がふたたび視察を再開させてしまっていた。
ドロシーの言うことも気にはなったが、混雑するマーケットの中で見失ったら、再度見つけるのは難しいに違いない。
「くそっ！　追うぞ！」

5

ドロシーは苦労していた。
いつもと違うやり方でカメラを構えているせいなのか。それとも何か他に理由があるのか。全然うまく撮れない。撮れる気もしない。
——こんなにうまくいかないのは何故なんでしょう？
あまり人物写真というのは撮らないドロシーだけれど、決して苦手というわけではなかった、はずだ。
人も自然も静物も変わりはしない。
よい——そのコらしい素敵な表情をしていたら、それをカメラに収めるだけ。
の、はずなんだけど……。
今ファインダー越しに見えているのは、ボースの市長、メイベルの姿だった。
財布を落とした客がいて、目ざとく落ちる瞬間を見たメイベルが拾って追いかけて、まさに渡すところ。
ちょっと走って追ったのでドロシーは息が切れている。

深呼吸してからファインダーを覗き込んだ。
「あ……」
まただ。
ドロシーがカメラを構える。ファインダー越しに彼女の姿を捉えて、ピントを合わせ、絞りを決めて、まさにシャッターを押し込もうとしたその瞬間。
すっとメイベルが顔を背けてしまった。
これでは撮れない。
いや、撮ってもいいのだけれど、それでは新聞には載せられないだろう。後ろ向きの肖像写真じゃしょうがない。仕方なしに再び集中して次の機会を待つ。
市長は半身にしていた身体を回転させ、一歩、二歩立つ位置を変えてから、顔をこちらに向けた。
——ああん、もう！　なんでですかぁ！
絶好のチャンスなのだけれど、前の人、邪魔です！
けれどもう、財布を渡す瞬間はそのときしかなくて、仕方なしにドロシーはシャッターを切った。
「あううう」
失敗だ。表情はばっちり撮れたけれど、トリミングをしないかぎり、余計なものまで写って

しまっている。
どういうことだろう？
こんな失敗は今までした経験がない。
覚えがない。
いつだって写すべき相手にあれこれ話しかけているうちに「いちばんいい瞬間」が訪れてくれた。その瞬間にシャッターを押すだけでばっちりの写真が撮れたのに……。
迷子が泣いていた。
泣き声に反応したのはやっぱりメイベルのほうが先で、男の子に駆け寄ったメイベルはあやしつつ手を繋いで両親を探し始めた。ナイアルと共にドロシーは後をつけるしかなかった。
ちょっと心配しつつ。
でもすぐに親が見つかって、ほっとしたドロシーはカメラを構えた。
物陰から様子を伺っているうちに、再び違和感がくる。
——あれれ？
なんだろう、あの人。
今度は市長の向こう側に妙な人がいる。
妙、と思ったのは、その男が何も見ていなかったからだ。ファインダー越しでもドロシーに

は彼の視線が近くの商品のどれも捉えていないのがわかる。
——なんであの人、店の奥なんて見ているのでしょう？
レンズを動かして、ピントを背後の男に合わせているうちにドロシーは気づいた。男の着ている服がおかしい。
「可愛くないですよぅ」
と、思わず呟いていた。
センスの問題ではない。ドロシーにはわかる。あの服はあの男の趣味ではない。自分で選んだ服じゃなくて、でも、どうしてそんな服をわざわざ着て、洋服屋なんて見ているのだろう？
「おい！　撮ったのか？」
先輩の声に我に返る。
「はは、はい！」
シャッターを切ってからドロシーは気づいた。しまった、ピントがそのままだ！
——何やってるんだ、わたし！
とんでもない失態だった。慌ててピントを市長に合わせなおしてから撮る。
けれど、そのときにはもうメイベル市長はかしこまった顔になって感謝して頭を下げる夫婦に向かって、子どもの手を離してはいけませんよ、と諭していた。
その前の、子どもに「よかったね」と微笑みかけたときのほうが、絶対いい顔だったのに！

ずーんと落ち込んでしまう。
「あれぇ、どうしたの、ドロシー」
聞き覚えのある声に顔をあげた。
「あ……エステルちゃん……」
遊撃士のコンビ、エステルとヨシュアだ。
「マーケットでお仕事？」
「あ、うん。そうなんだ～」
ニコニコした顔のエステルに負けじとドロシーもなんとか笑みを作る。さすがにこのふたりの前で落ち込んだ顔なんて見せられない。
長い髪を左右でおさげにした少女がエステル・ブライト。王国では珍しい漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つヨシュアはその弟だという。ふたりともドロシーよりも年下なのだ。
少し前に知り合ったこの遊撃士コンビは、行方不明の父親を探すために王国内を旅している。
そんな彼らが元気なのに、自分が落ち込んでいるところは見せられない。
「そっかー。お仕事、大変みたいね」
と言って、エステルがにこっと微笑む。
「いえいえ～。それよりエステルちゃんたちは……？」
「僕たちは買い出しです」

「ちょっとハーケン門のほうまで行かなくちゃいけなくなってさ！　ほら旅をするにはそれなりの支度がいるじゃない？」
「でも、そのお菓子は余計だと思うけど」
　愛用の棍を背にした遊撃士の少女に向かって、ヨシュアが冷静に突っ込んだ。エステルは左右の手にふわふわのカステラを持っている。
「ふっふっふ、ヨシュア、このエステルさんがいいことを教えてあげるわ」
「……一体どうしたのさ」
「いい？　この世にはね、『腹八分目じゃ戦えない』ってことわざがあるのよ！」
「そんなことわざ無いと思うんだけど」
「いいの！　あるったらあるの！　なかったらつけておいて！」
「つけが利くのか……」
「これは女の子の真理なんだから！」
「はぁ……君の気持ちも分からなくはないけど、僕たち遊撃士にとって食べ過ぎは危険じゃないかな？」
「き――きけん？」
「命の危険ってこと」
「な、なによ。それってどういう……」

「戦いのときの立ち回りに支障が出る、かもしれないだろ？」
　ヨシュアのまわりくどい言い回しに気づいたのはドロシーのほうが先だった。思わず口にしてしまった。
「つまり、エステルちゃんがカステラの食べ過ぎでふっくらモチモチしちゃうってことか～。それはそれで可愛いかもですねぇ」
「あ、あんですってぇ～～～！」
　ヨシュアに向かって手を振りあげ、その手がカステラを握り締めていることに気づいて手を下ろした。
「僕は言ってないけど」
「ううう～～」
　唸りながらエステルがヨシュアを睨みつける。
「うふふ。相変わらず仲がいいんだね～」
「へ？」
「うらやましいなぁ。兄弟っていいよねー」
「あ、うん。よく言われる。えへへ」
「仲良きことは良き哉だよ～」
　エステルはドロシーの言葉にありがとう、と笑顔になり、そんなエステルを見てヨシュアが

肩をすくめつつ、優しい笑みを浮かべた。
「おおい。ドロシー！」
声に振り返る。ナイアル先輩がいつの間にか移動していて、北側出口に向かう通路のほうから呼んでいた。
「っと、先輩が呼んでるみたいだから、またね～！」
遊撃士コンビに別れを告げて、先輩のほうへと駆け寄る。
「あの、今エステルちゃんたちが――」
「ああ、見えた。それより、今日はもう退散するぞ。そろそろ夕方になるし、市長も姿を消しちまった」
「えっ。見失っちゃったんですか？」
そう言ったら、苦々しげな顔つきになった。まさか、ナイアル先輩がまかれちゃうなんて。
でも、とドロシーは思った。ちょうど良かったかも。
今日はろくな写真が撮れなかった。仕切りなおしたほうがいい気がする。でも、次は、きっと……！
うん。エステルちゃんたちのおかげで少し元気になれたかも。
「ホテルに戻るんですか？」
「ああ」

「じゃあ、わたし、ちょっと今日撮ったぶんだけ焼きつけてきちゃいます」
自分的には決して満足できない写真だが無駄にはできない。写真が記事に採用されるかどうかを決めるのはドロシーではないのだ。
「その必要はありません」
凛、とした声だった。
顔をあげると、どこかで見たような……メイドさん？
「あんたは……」
「わたしは『あんた』などという名前ではありません。記者ナイアル・バーンズ殿。リラ、と申します」
いつの間にか目の前に立っていたのは朝に市長邸で出会ったメイドだった。
「オーバルカメラをお預かりさせていただきます」
「んだとぉ？」
ナイアル先輩の悪い目つきが増し増しに悪くなった。まるでこれから喧嘩をする前の不良さんみたいな目。ドロシーにはあまり見せたことがない。
「これは保安上の処置ですので、ご了承願います」
そう言うリラの後ろに、ずらりといつのまにか街の自警団が並んでいた。
否も応もなく、ドロシーのカメラは取り上げられ。



何もわからないまま、ふたりとも、マーケットの外へと放り出された。

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



① 1名様

ファルコムBOOKS
「英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～（1）」サイン本

本誌読者のために啄木鳥しんき先生がサインしてくれた貴重な１冊をプレゼント!!



② 3名様

小説『英雄伝説 空の軌跡』オリジナルカード3枚組セット

小説『英雄伝説 空の軌跡』（著：はせがわみやび、イラスト：ワダアルコ）イベント特典のオリジナルカードセットを3名にプレゼント!!

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.99プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①『イースⅨ』情報が続々解禁！ 今作の印象は？
　アンケート②GW中にしたい(した)ファルコムに関することは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：イースⅨ最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡
　リベール王国スナップショット

応募締め切り **5月29日（水）**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。





月刊FALCOM MAGAZINE Vol.99

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/